

第 12 回国際ベートーヴェンピアノコンペティション

12. Internationaler Beethoven Klavierwettbewerb in Wien

今 井 顕

IMAI Akira

国立音楽大学音楽研究所年報 第 19 集抜刷

2006 年 3 月 31 日発行

第12回国際ベートーヴェンピアノコンペティション

報告：今井 顕

2005年6月4日から14日までの日程で、第12回国際ベートーヴェンピアノコンペティションがウィーンで開催された。筆者はこのコンペティションの国際審査員として招聘され、全審査に携わった。これを機会にコンペティションの内容と結果を記録しておきたい。

■正式名称

12. Internationaler Beethoven Klavierwettbewerb

■概要

主催者は Universität für Musik und darstellende Kunst Wien（ウィーン国立音楽演劇大学、通称ウィーン国立音楽大学。本論では以下通称を使用する）で、オーストリア外務省 Bundesministerium für auswärtige Angelegenheiten、オーストリア教育科学文化省 Bundesministerium für Bildung, Wissenschaft und Kultur およびウィーン市文化局 Kulturabteilung der Stadt Wien より公費の補助を受けて運営されている。これ以外にも20を超える内外のスポンサー（大小の組織や個人）からの寄付が寄せられているものの、財政状態はあまり良くない。

このコンペティションは1961年にウィーン国立音楽大学のピアノ科教授たちによって設立されたもので、以来4年に1回のペースで開催されている。第3回には内田光子、第4回にジョン・オコーナー、そして第7回にシュテファン・ヴラダーが第1位に輝くなど、優勝者の中には日本人にも馴染みのある名前が散見される。現在もコンペティションの運営に関する実務の多くは同大学ピアノ専攻科教授たちによって遂行されている。

コンペティション最大の特徴は「ベートーヴェンのピアノ作品の演奏のみで力量が試される」という点である。また1位受賞者には副賞としてベーゼンドルファー社のグランドピアノ（モデル200）が授与されるのも特筆しておくべきだろう。

コンペティションに参加可能なのは1973年1月1日～1988年12月31日の間に生まれた者（概算で16～32歳）で、国籍、性別に制限はない。

■開催スケジュール

2004年9月30日に参加申し込みが締め切られた後、2005年2月に東京、ソウル、ニューヨーク、パリ、ロンドン、ボン、ベルリン、ウィーンの各都市で、ウィーンで開催されるラウンドに出場できる者を選抜するための予備予選が行われた。これは、美辞麗句に制限のない書類による選考などでは生じざるを得ない不公平を防止するためのもので、すべての者が例外なく参加しなければならない。参加申し込みは世界各国より276名もの数に登ったが、最終的には37名がウィーンのラウンドへ選出された。

〈ウィーンでの日程〉

- ・6月4日18時30分：ウィーン楽友協会にて開会レセプション
- ・6月5日9時：ウィーン国立音楽大学にて審査員の事前打ち合わせ
- ・6月5日～10日（10時/15時30分）：第1次予選¹。会場はウィーン国立音楽大学の Joseph Haydn Saal。使用ピアノはベーゼンドルファー。
- ・6月11日～12日（10時/15時30分）：第2次予選²。会場はウィーン楽友協会の地下に新設された Gläserner Saal (Magna Auditorium)、使用ピアノはベーゼンドルファー。
- ・6月13日：オーケストラリハーサルのため、審査なし。審査員（希望者）にはウィーン近郊への遠足（クロスター・ノイブルク見学とホイリゲでの会食）が提供された。
- ・6月14日19時30分：本選。会場はウィーン楽友協会の大ホール。協演は Bernard de Billy 指揮の Radio-Symphonieorchester Wien。終演後審査会議を経て結果発表と受賞セルモニーが行われ、楽友協会内でレセプションが深夜まで行われた。

■課題曲（すべてベートーヴェンの作品）

〈申し込みの際に提出しなければならないレパートリー〉

- ・グループ1：ソナタ第1～12番（第9、10番は除く）より1曲
- ・グループ2：ソナタ第13～27番（第19、20、25番は除く）より1曲
- ・グループ3：ソナタ第28～32番と《ディアベリ変奏曲》より1曲
- ・グループ4：以下の変奏曲から1曲
創作主題による6つの変奏曲 作品34 / 《エロイカ》の主題による変奏曲とフーガ 作品35 / リギーニの《恋人よ来たれ》による24の変奏曲 WoO.65 / ヴラニツキの《森の乙女》の主題による12の変奏曲 WoO.71 / 創作主題による32の変奏曲 WoO.80
- ・グループ5：以下の小品から1曲
7つのバガテル 作品33 / 2つのロンド 作品51 / 幻想曲 作品77 / ポロネーズ 作品89 / 11のバガテル 作

¹ レパートリーとして要求された作品はすべて途中でカットされることなく演奏された。

² レパートリーとして要求された作品はすべて途中でカットされることなく演奏された。

品119 / 6つのバガテル 作品126 / ロンド・ア・カプリッチョ 作品129 / アンダンテ・ファヴォリ
WoO.57

・グループ6：協奏曲第1～3番、第4&5番の2グループからそれぞれ1曲

※レパートリーにはソナタ第28、29、32番、《ディアベッリ変奏曲》(以上グループ3)、《エロイカ変奏曲》(グループ4)のいずれか1曲を必ず含め、演奏すること

※各地区で行われる予備予選ではグループ1～3から2曲(同一グループからの2曲は不可)、グループ4から1曲選ぶこと

〈コンペティションの各予選で演奏する作品〉

第1ステージ(第1次予選)：グループ2から1曲、グループ4と5から1曲ずつ、計3曲

第2ステージ(第2次予選)：グループ1と3から1曲ずつ、計2曲

第3ステージ(本選)：グループ6から、指定された1曲

■賞³

・第1位※：7,000ユーロ(約88万円、オーストリア教育科学文化省提供)とベーゼンドルファーのグラ
ンドピアノ、モデル200(ベーゼンドルファー社提供。日本国内での価格は2005年の時点で約870万円)の
1台

・第2位：5,500ユーロ(約70万円、東京の石森安英氏提供)

・第3位：4,000ユーロ(約50万円、ニューヨークのアレクシス・グレゴリー Alexis Gregory 氏提供)

・入賞者賞(3名)：1,500ユーロ(約19万円、ヨーゼフ・ディヒラー Prof. Dr. Josef Dichler 賞、リヒャルト・ハウザー Prof. Richard Hauser 賞、およびヴィルヘルム・ラージンガー Dr. Wilhelm Rasinger 賞)

・その他特別賞：ゴンダ・ヴァイナー Gonda Weiner 賞(2,000ユーロ、約25万円。グループ3の最優秀演奏者へ)、モリー・ヨー＝マテ Molly Joó-Máté 賞(1,000ユーロ、約12万5千円。本選へ残れなかった第2次予選の最年少演奏者へ)、クレメンス・クラマー Klemens Kramert 賞(1,500ユーロ、約19万円。最優秀のオーストリア人参加者へ)

・この他にさまざまなコンサートなどが提供される。

※第1位該当者が選出されなかった場合、副賞のベーゼンドルファーを最上位の受賞者に授与するかは、審査員が決定する。

※優勝者は、主催者が計画したウィーンを含めたオーストリア各都市、諸外国での演奏会に出演できる。

³ 日本円に換算した額は2005年の為替レートを基準にした概算である。

■審査員

ペーター・エフラー Peter Efler (オーストリア)

クリストファー・エルトン Christopher Elton (イギリス)

今井 顕 Akira Imai (日本)

カールハインツ・ケマリング Karl-Heinz Kämmerling (ドイツ・オーストリア)

ドミニク・メルレ Dominique Merlet (フランス)

タチアナ・オグヤノヴィッツ Tatjana Ognjanovic (スロヴェニア)

申 秀貞 Soo-jung Shin (韓国)

エリック・タヴァシエルナ Erik T. Tawaststjerna (フィンランド)

ブランカ・ウリベ Blanca Uribe (アメリカ合衆国)

ヴォルフガング・ヴァツィンガー Wolfgang Watzinger (ドイツ・オーストリア)

正副審査員長 (採点には参加せず、採点の集計を行う)

ハインツ・メジモレッツ Heinz Medjimorec (オーストリア)

ローラント・ケラー Roland Keller (ドイツ・オーストリア)

■審査方法の特徴 (抜粋)

- ・演奏順は名字のアルファベット順。ただしくじ引きによって決定されたアルファベットから開始される。
- ・自分の教え子が参加している場合でも、師弟関係が2年以上前のものであれば採点できる。
- ・演奏の評価は25点満点のシステムで行い、小数点以下は用いない。
- ・次の予選に進めなかった参加者の評価平均点は審査員に開示される。
- ・正副審査委員長は点数の集計のみに専念し、自ら採点は行わない。
- ・点数は小数点以下第2位まで計算する (第3位の数値は四捨五入される)。
- ・特定の審査員の評価点が次点のものより5点以上多い、または少ない場合、この評価点は自動的に次点と4点差になるように調整される。次点と5点以上の隔たりがある評点が複数存在する場合には、この調整は行われない。
- ・ウィーンでのコンペティションに先だって世界各地で行われる予備予選の免除は、いかなる理由があっても認めない。
- ・予備予選の審査員はウィーンから派遣されるウィーン国立音楽大学ピアノ科の教授⁴と開催地から選出された審査員が共同で行う。予備予選の結果によって選出される参加者は36名を超えてはならない。

⁴ 各地に派遣されるウィーン国立音楽大学からの審査員は、必ずしも同じメンバーではない。しかし彼らは日常からさまざまな試験や学内のコンペティションと一緒に採点を行っており、審査の基準となる見地や採点レベルに大きな差がないとみなし、各所から報告される採点を統一・集計した上でウィーンへの参加者が決定される。

・ウィーンにおいて第2次予選に通過するためには、平均点が16点以上なくてはならない。第2次予選に通過できるのは12名だが、点数が小数点以下第2位まで同点の場合に限り、12名以上の通過が例外的に認められる。

・第2次予選での点数に第1次予選の点数が加味され、この合計点が上位の者3名が本選に通過できる。同点などの事情から3名に限定できない場合は協議を行い、審査員の多数決で採決する。多数決の結果が同数の場合は、審査員長がこれを決定する。

・本選に通過できず、入賞者賞も授与されなかった参加者に対してはディプロマが発行されるが、第1次と第2次予選の総合点が32点以上なければならない。

・本選での順位は本選を含めたすべての評価点の総合点をもとに判断されるが、1位になるためには最低48点獲得していることに加え、審査員の過半数が1位該当者を選出することに関して賛成しなければならない。この条件が満たされない場合は最高位が2位となり、3番目の順位の者には入賞者賞が授与される。

・最高位の者と次点の者の得点差が1点以内の場合は「順位票」が集計される⁵。この順位票が同数の場合は第1次予選からの点数平均を比較し、これもが同点の場合のみ両者を *ex aequo* として1位にし、1位と2位の賞金を併せて二分割してそれぞれに授与する措置がとられる。2位と3位が同じ状況になった場合も、同様の処理が行われる。

・1位が2名の場合、また1位が空席の場合、副賞としてベーゼンドルファー社より提供されているグラインドピアノの扱いは、審査員の判断に委ねられる。

・本選における演奏が不調に終わり、評価点の平均点が10点を下回った場合は、入賞者賞も含め、何の賞も授与されない。

・本選で演奏する協奏曲は1曲のみで、くじによって決められる。その際、3名がそれぞれくじをひくのではなく、あらかじめ準備された協奏曲の組み合わせからひとつだけを選択する方法がとられる。この組み合わせからは3名全員が同じ作品を演奏する組み合わせは除外されている。

・コンペティション終了後、参加者はそれぞれの予選における審査の平均点を知ることができるが、審査員個別の評価点は公表されない。なお審査員はすべての審査員個別の評価点を閲覧することができる。

■参加者

〈申し込みが受理された参加者の内訳〉

49カ国からの276名⁶。

日本 (62) — 韓国 (39) — ドイツ (20) — アメリカ合衆国 (15) — ロシア (15) — イタリア (11) — 台湾 (10) — 中国 (9) — オーストリア (8) — イギリス (7) — ウクライナ (7) —

⁵ 何人の審査員が、該当する参加者に最高点を与えることによって1位として推薦しているかの比較。

⁶ 参加者のうち5名は二重国籍保持者である。

フランス (6) — ギリシャ (4) — ルーマニア (4) — エストニア (3) — カナダ (3) — クロアチア (3) — スペイン (3) — セルビア=モンテネグロ (3) — フィンランド (3) — アイルランド (2) — イスラエル (2) — オランダ (2) — カザフスタン (2) — スイス (2) — チェコ (2) — トルコ (2) — ハンガリー (2) — ブラジル (2) — ブルガリア (2) — ポーランド (2) — リトアニア (2) — ウズベキスタン (1) — オーストラリア (1) — グルジア (1) — コロンビア (1) — スウェーデン (1) — スロヴェニア (1) — ニュージーランド (1) — ベラルーシ (1) — ペルー (1) — ポルトガル (1) — マレーシア (1) — ラトビア (1) — 韓国とチリの二重国籍 (1) — オーストリアとアメリカの二重国籍 (1) — ドイツとイギリスの二重国籍 (1) — ボスニア=ヘルツェゴビナとセルビア=モンテネグロの二重国籍 (1) — ロシアとアメリカの二重国籍 (1)

〈ウィーンでのコンペティションで演奏した者の内訳〉

14カ国からの35名、男性19名・女性16名。

韓国 (9) — 日本 (7) — ドイツ (5) — イタリア (2) — オーストリア (2) — フランス (2) — イギリス (1) — イスラエル (1) — ウクライナ (1) — 台湾 (1) — フィンランド (1) — リトアニア (1) — ルーマニア (1) — ロシア (1)

〈演奏者詳細〉

登録番号	予選演奏順 ⁷	氏名	性別	生年	国籍	結果
2	27	AHN Soo-Jin	女	1979	韓国	第1次予選のみ
4	28-11	ALEKNA Gabrieli	男	1975	リトアニア	第2位
15	29	BIRINGER Esther	女	1983	ドイツ	第1次予選のみ
17	30	CANGELOSI Olivier	男	1978	フランス	第1次予選のみ
19	31	CHA Soo-Jin	女	1985	韓国	第1次予選のみ
26	32	CHEN I-Ting	女	1986	台湾	第1次予選のみ
28	33	CHO Da-Jung	女	1984	韓国	第1次予選のみ
30	34	CHUN Eunyoung-Erika	女	1984	韓国	第1次予選のみ
37	35	DAL SANTO Gabriele	男	1980	イタリア	第1次予選のみ
72	1	GORLATCH Alexej	男	1988	ウクライナ	第1次予選のみ
75	2	GUTTMAN Renata	女	1980	イスラエル	第1次予選のみ
79	3-12	服部 慶子	女	1979	日本	第2次予選まで

⁷ 演奏順が2種類表示されている場合は、それぞれ第1次および第2次予選での順序を示す。

84	4	HOLMSTRÖM Emil	男	1980	フィンランド	第1次予選のみ
98	5	JUN Ji-Hoon	男	1986	韓国	第1次予選のみ
105	6	菊地 裕介	男	1977	日本	第1次予選のみ
127	7	KÖNIG Andreas	男	1983	ドイツ	第1次予選のみ
137	8	LEE Joanna Jimin	女	1976	韓国	第1次予選のみ
138	9-1	LEE Yoo-Seon	女	1977	韓国	第2次予選まで
143	10-2	LIM Hyo-Sun	女	1981	韓国	第2次予選まで、第6位、ヴィルヘルム・ラージンガー賞およびゴンダ・ヴァイナー賞
171	11-3	根岸 弥生	女	1984	日本	第2次予選まで、モリー・ヨー＝マテ賞
173	12	NIES Johannes	男	1984	ドイツ	第1次予選のみ
182	13-4	OVTCHAROV Peter	男	1981	ロシア	第3位
196	14	POPOVICI Toma	男	1975	ルーマニア	第1次予選のみ
197	15	POSTER Tom	男	1981	イギリス	第1次予選のみ
199	16-5	RHEE Yoon-Soo	女	1981	韓国	第2次予選まで
206	17	佐野 まり子	女	1974	日本	第1次予選のみ
211	18-6	佐藤 卓史（たかし）	男	1983	日本	第2次予選まで
213	19-7	SCHUCH Herbert	男	1979	ドイツ	第1位
215	20	SCHWINDT Ingmar	男	1977	ドイツ	第1次予選のみ
217	21	SECCHI Andrea	男	1975	イタリア	第1次予選のみ
230	22-8	SOUCEK Matthias	男	1978	オーストリア	第2次予選まで、第5位、リヒャルト・ハウザー賞
238	23-9	高橋 礼恵（のりえ）	女	1978	日本	第2次予選まで、第4位、ヨーゼフ・ディヒラー賞
239	24	竹花 千景	女	1978	日本	第1次予選のみ
255	25-10	VITAUD Jonas	男	1980	フランス	第2次予選まで
259	26	WILHELM Johannes	男	1984	オーストリア	第1次予選のみ

■最後に

“音楽の都”と称されるウィーンの国立音楽大学が主催し、公費の補助金も拠出されてはいるものの、毎回の事ながら財政面の運営が難しく、コンペティション存亡の危機に瀕していると言っても言い過ぎではない状況だという。今回も、今までスポンサーとして貴重な援助を提供していたオーストリアの航空会社がその座を辞退したため、世界各地の予備予選を開催するに当たって大きな問題が生じた模様だった。

どのように経済的補助を確保していくかはベートーヴェンコンペティションに限らず、世界の音楽コンペティション共通の問題となっている。1995年よりベートーヴェンの生誕地ボンでもベートーヴェンを課題としたピアノコンペティションが立ち上げられたが、新たなライバルを前にして、伝統あるウィー

